

青森市浪岡 うえの 上野遺跡

現地見学会資料

日時：平成20年7月19日（土） 10時30分～



上野遺跡発掘現場（南東から撮影）

調査の概要

- ・ 遺跡名：上野遺跡（青森県遺跡番号 29011）
- ・ 所在地：青森市浪岡大字樽沢字村元ほか
- ・ 調査期間：平成20年4月22日から7月25日まで
- ・ 調査面積：約1,500㎡
- ・ 原因事業名：県道五所川原浪岡線交通安全施設整備事業
- ・ 調査委託者：青森県県土整備部道路課
- ・ 調査担当機関：青森県埋蔵文化財調査センター

上野遺跡は青森市浪岡大字郷山前字上野から大字樽沢字村元にかけて広がる、縄文・平安時代の遺跡として知られています。今回の発掘調査では、縄文時代の掘立柱跡や竪穴住居跡22軒をはじめとする平安時代の集落跡、江戸時代の「しものきり下之切通り」とみられる街道跡などが見つかりました。

平安時代の集落跡 ー 竪穴住居跡から^{りょくゆうとうき}緑釉陶器の破片が出土ー

平安時代の遺構には、竪穴住居跡22軒、土坑15基、溝跡5条、円形周溝2基などがあります。発見された土器からみて9世紀～10世紀の集落であると考えられ、いくつかの土坑や溝跡の堆積土には、10世紀半ばに朝鮮半島の白頭山の噴火によって飛来した火山灰が含まれています。各遺構は重なって見つかるものも多く、すべてが同時に存在したものではありませんが、今回発掘調査を行った延長180mの区域全体に平安時代の遺構が広がっているため、比較的規模の大きな集落であった可能性があります。竪穴住居跡の平面形は四角く、南東の壁際にカマドが設置されているものが多くみられます。竪穴住居跡の大きさは、3～4mの小型のもの、5mほどのもの、7mを超える大型のものと数種類に分かれています。建てられる場所はある程度決まっていたようで、古い住居を壊して新しい住居が建てられていたり、小さい住居から大きい住居へ改築した様子を見ることができ



上：18号竪穴住居のカマド

15号竪穴住居跡の内部にある穴からは、「^{りょくゆうとうき}緑釉陶器」とよばれる^{うわぐすり}緑色の釉薬をかけて焼かれた陶器が出土しました。緑釉陶器は現在の京都周辺や滋賀県、愛知県などが主な産地のため、遠くから持ち込まれた貴重品といつてよいでしょう。この破片は、一辺が2cmに満たない小さなものですが、もとは椀か皿の一部です。何らかの事情で割れた後、三辺をこすって平らに整形しており、貴重品として大切にされたものと考えられます。緑釉陶器が出土した遺跡は県内でも例が少なく、津軽地域では青森市新田(1)遺跡(青森市教育委員会が調査)に次いで2例目のようです。



上：緑釉陶器の破片

右：15号竪穴住居跡

緑釉陶器は中央付近の
穴から出土しました



街道跡 ー江戸時代の「^{しものきり}下之切通り」か？ー

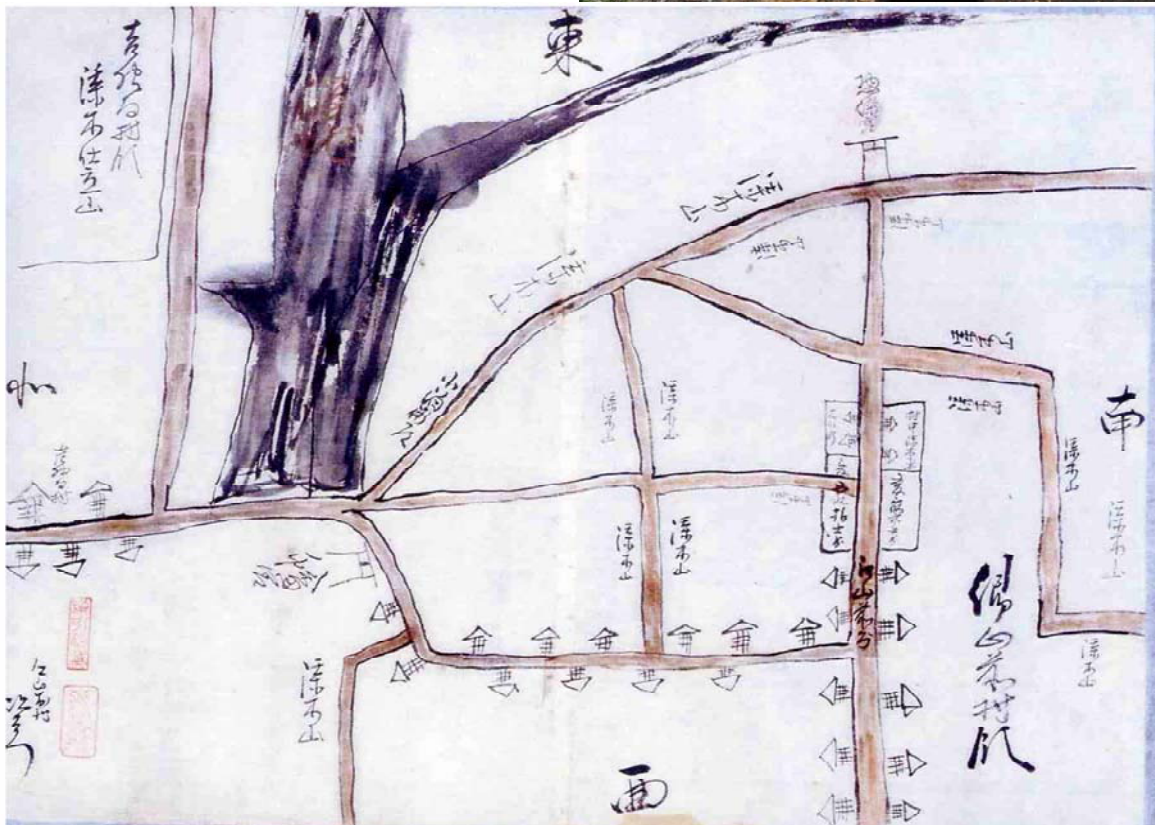
現在の県道34号線の南西に沿って、黄褐色の基盤層が踏み締められたように非常に固くなった部分が延長35mにわたって見つかりました。その脇には幅・深さともに50cm程の溝が掘られており、側溝を備えた道路跡であることが分かりました。

江戸時代には青森市浪岡大字^{しろがね}銀を起点とし、野沢地区を経て、五所川原市金木・中泊町中里から十三湖の北岸を通過して小泊へ至る、「下之切通り」と呼ばれる弘前藩の重要な街道の存在が知られています。今回発見された道路は、その「下之切通り」の一部ではないかと考えられます。

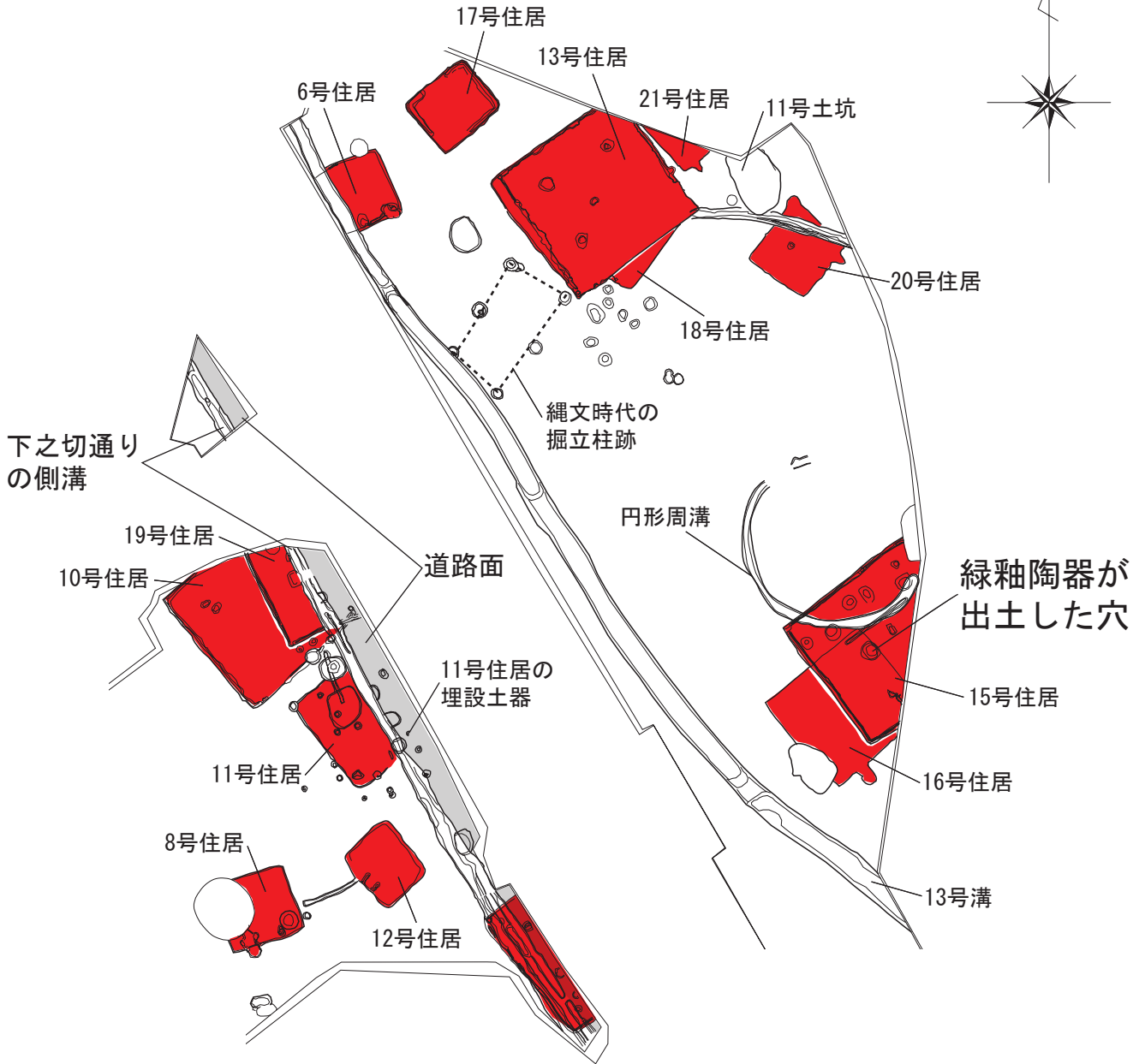
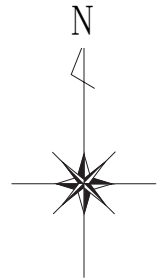
嘉永5年（1852年）頃の『郷山前村漆山絵図』には、村の中心から東に外れた漆林の中を「下之切通り」が通っている様子が描かれており、そのルートは現在の県道34号線と重なることが分かります。なお、「下之切通り」には「^{しものきりみち}下之切道」や「^{こどもりかいどう}小泊街道」、「^{こどもりみち}小泊道」など多くの呼び方があります。


下：『郷山前村漆山絵図』

右：発見された道路跡

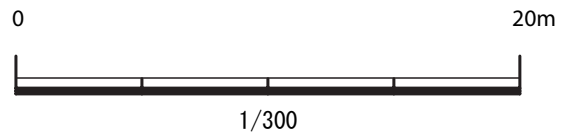


上野遺跡 遺構配置図



 は竪穴住居跡

遺構は主なもののみを示した



青森県埋蔵文化財調査センター

青森市新城天田内152-15

電話 017-788-5701

<http://www.ao-maibun.jp>